

True Colors THEATER :
「多様性を包摂した舞台体験」のための探索的実践
報告書

東京大学
井筒節

要旨

True Colors Festival（以下、TCF）では、これまで様々なパフォーマンスアーツを通して、多様性をめぐる楽しみと気づきを生み出してきた。

True Colors THEATERでは、過去のTCFの取組みに基づき、「多様性を包摂した舞台体験」について、実際の舞台公演の制作・実施を多様な「当事者」と共に「多様性の包摂」を進めながら行い、これを通して研究的視野でニーズやソリューションを示すことを目指した。この際、カテゴリーで人を区別するのではなく、すべての人が異なっていることを前提にした。

舞台公演は、「ストーリー」、「スタッフ」、「出演者」、「観客」、のそれぞれにおいて障害・ジェンダー・年齢等の多様性を包摂する形で、2024年8月に、東京の劇場にて全7公演を実施した。

この経験を、参与観察及び聞き取りに基づき本報告書にまとめ、今後の公演に資するよう「多様性を包摂した舞台のためのチェックリスト」を作成した。

I. 概要

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS は、TCFにおいて、「体験する」、「学ぶ」、「アクセシビリティ」をキーワードに、様々なパフォーマンスアーツを通して、多様性をめぐる楽しみと気づきを生み出してきた。

True Colors THEATER では、過去の TCF の取組みに基づき、「多様性を包摂した舞台体験」について、実際の舞台公演の制作・実施を「当事者」と共に「多様性の包摂」を進めながら行い、これを通して研究的視野でニーズやソリューションを示すことを目指した。

舞台公演は、2024年8月に、東京都にある約250人を収容できる既存の劇場において、商業演劇の舞台制作に携わる演出家のもと、実際にチケットを発売し、全7公演を実施、698人の観客が観劇した。商業ベースで行われるものと同様の規模・環境・条件での本格的舞台制作を行い、多様性の包摂をめぐる現実の好事例、教訓を検討した。

舞台公演制作・実施等を通して、(1) ストーリー、(2) スタッフ、(3) 出演者、(4) 観客のそれぞれにおいて、年齢・出身地・ジェンダー・セクシュアリティ・障害等の多様性の包摂を促進した。公演では、人権に関する情報共有、手話通訳、字幕、リラックス公演等、様々な取組みを取り入れた。これにより、舞台のあるべき姿を目指しつつ、新たな気づきを得た。

本報告書は、このプロセスを参与観察及び聞き取りに基づきまとめたものである。また、これを礎に、今後の公演に役立てられるよう「多様性を包摂した舞台のためのチェックリスト」を作成し、巻末に付した。

II. 舞台制作の実際

ここでは、参与観察と聞き取りに基づき、舞台制作のステップごとに、経緯や実施した内容をまとめた。多様性包摂に深く関連し、今後の舞台制作に有用と思われる個所には下線を引いた。

1. 公演企画の立案

TCFの一環として、日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS、多様性を包摂した芸術に関する専門家（音楽・映画・舞台等の文化と人権を専門とする専門家）、演出家が、多様性を包摂した舞台体験として、True Colors THEATER を開催することを決定。「ストーリー」、「スタッフ」、「出演者」、「観客」のそれぞれにおいて多様性の包摂を進めながら舞台公演を、多様な当事者と共に制作することを決定。

2. 劇場選び

都内にある、商業演劇で使用されるキャパシティ約 250 人の中規模劇場を予約。

劇場を訪れ、最寄り駅、駅から劇場までの経路、劇場入口から客席までの経路、ホワイエ、トイレ、客席、楽屋口から楽屋、楽屋から舞台への導線、舞台、袖の導線、舞台装置等の搬入口等のアクセシビリティ¹を確認。 駅には車いすで利用できるエレベーターがあり、駅からの経路には大きな段差がなく、誘導ブロックがあることを確認。また、劇場には車いすで利用できるエレベーターがあり、客席には車いすで観劇できるスペースが4席分用意されていた。ホワイエには、男女別のトイレに加え、多目的トイレが1つあった。一方、スタッフや出演者が使用する楽屋口、楽屋と舞台の移動経路には、階段があり、エレベーターはなく、車いすでの移動は難しかった。また、舞台と観客席の移動経路にも階段があった。よって、車いすユーザーの出演者や舞台回りのスタッフ採用は難しいことが判明。

劇場スタッフから、字幕の映写可能性等、情報アクセシビリティ確保や、その他のアクセシビリティ上のこれまでの経験・教訓等について聞き取りを行い、対応策を共に検討した。

障害等により車での移動が必要な方がいることを想定し、スタッフ・観客用の劇場専用駐車場を確認したがなかった。一方で、至近距離内に時間貸しの駐車場があり、使用者が代金を支払うことで使用できることを確認した。

¹ 障害のある人が、自立して生活し、及び生活のあらゆる側面に完全に参加することを可能にすることを目的に、他の者との平等を基礎として、建物などの物理的環境、公共交通機関を含む輸送機関、情報通信、その他のサービスを利用する際、社会的障壁がなく、利用しやすいこと。

3. 台本作成

台本は、多様性を包摂した芸術に関する専門家と演出家が協働しながら作成した。主題として、戦時下の男子学生二人の淡い恋とも友情ともとれる関係性を描くこととした。

また、国籍、年齢、障害、性被害等についても物語に包摂することで、戦時中にも多様な人々による多様な関係性があったことを当たり前に描いた。また、互いに対する感情や関係性の幅・揺れを描くことで、それらがスペクトラム（明確に区別できる形ではなく、グラデーションのように連続的な形で、様々な違いがあること）であることを表現しつつ、キャストや観客の表現・受け取り方の幅も広げた。更に、設定や表現、使用する台詞等が、誰かを傷つけたり、ステレオタイプを助長したり、分断や対立を煽らないか意識した。一方で、物語はフィクションであり、創造性の観点から必要・適切な表現であるかの観点も用いた。

更に、その他の登場人物にも、年齢、国籍、ジェンダー、セクシュアリティ、障害等の多様性があったことを反映させるため、役柄にも年齢、国籍、ジェンダー、セクシュアリティ、障害等の多様性を持たせた。その際、表現がチャリティモデル・医学モデル²等に基づいたり、助長したりしないよう意識した。また、ステレオタイプを打破するために、味方と思われがちなキャラクターが悪事を働き、敵方と思われがちなキャラクターが助けしてくれる設定や、クラスの人気者が障害をもっているといった設定等を用いた。

また、手話通訳、字幕等の情報アクセシビリティの確保は行うものの、それらなしでも、台詞だけ、または、視覚だけでも伝わる作品を目指した。

この過程では、年齢、国際経験、ジェンダー、障害等の多様性のある協力者や専門家に、原稿を読んでもらい、リアルさを持ちつつ、ステレオタイプで描かず、また、万一当事者を傷つけたり、不快にさせたりしないか、当事者の視点と多様性包摂の専門性からの確認を行った。

上演時間については、長時間の観劇体験が辛い方々のニーズを想定し、90分程度とした。

台本については、アクセシビリティ施策の一環として、希望者に事前に閲覧できるようにすることも検討したが、演出意図に基づき、今回は実行しなかった。

² 国連障害者権利条約（2006）では、障害者には「長期的な身体的、精神的、知的又は感覚的な機能障害であって、様々な障壁との相互作用により他の者との平等を基礎として社会に完全かつ効果的に参加することを妨げ得るものを有する者を含む」とされ、障害は環境・情報、制度、態度をめぐる社会的障壁（バリア）が生むと考える障害の「社会モデル」が採用された。これにより、障害のある人を支援の受動的な受け手として捉える「チャリティモデル」や、障害を医学的コンディションをはじめとする個人に起因すると考えたり、個人に「治療等」による変化を求める「医学モデル」は否定されるようになった。

4. スタッフの登用

スタッフの登用においても多様性の促進を目指した。まず、スタッフの登用は、国内外での多様性に関連する作品の演出経験がある演出家を中心となって行ったが、多様性を包摂した芸術分野の専門家が、各ステップの計画について、多様性包摂の観点から寄り添った。

これによって編成されたチームについて、以下に、全体の役割分担と共に記した。

主催は、日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS が担った。舞台制作及びアクセシビリティ施策に関する資金を拠出した他、ホームページ作成やプレスリリース発出など、広報の一部も担当した。

制作（スケジュール管理、広報の一部（チラシ作成）、票券（チケット予約のためのプレイガイドとの調整、関係者受付、配慮が必要な方を含む観客の座席割当て、もぎり）、ホワイエ周りのマネージメント、出演者・スタッフのお弁当管理、差し入れやプレゼントの管理）は商業演劇で制作を行ってきた制作チームが担った。

舞台監督は、学生演劇を行う若者が担った。

演出部も、学生演劇を行う若者が担当した。

音楽（作詞・作曲）、稽古ピアノ、ムーブメント・振付、照明、衣装、音響は、それぞれ商業演劇で活躍するプロをリクルートした。

更に、多様性と文化をめぐる活動を行う学生団体が、制作のそれぞれのフェーズで、現代の若者の視点から多様性やアクセシビリティのチェックを行い、インプット・改善を行った他、本番では劇場前及びホワイエにて、多様性・アクセシビリティの観点からのサポート要員として公演に協力した。

加えて、障害者当事者団体にもチームに加わってもらい、様々な段階で、インプットをお願いした。

アクセシビリティ施策については、各部門に主流化（メインストリーム）した。例えば、字幕は、演出部が作成、映し出しは照明が行った。また、舞台上手に常時手話通訳者がいることとし、これを2名の手話通訳者が公演ごとに交代して担当した。台本の手話翻訳には、通訳者のアレンジで、別途、手話翻訳専門家がアドバイザーとして参加した。一部公演で提供した音声ガイダンスについては、音声ガイダンスの専門家がガイダンス用台本を作成し、マイク・レシーバー等を持参の上、サービスを提供した。

5. キャスティング

年齢、ジェンダー、障害等の観点から多様な役者をキャストした。映画やミュージカル等で活躍するプロフェッショナルな役者（子役を含む）を中心に、視覚障害のある出演者やダウン症のある出演者の他、学生演劇を行う若者も出演した。

ジェンダー、障害、病気等、「当事者が演じるべき」との考えもあるが、演劇とは「演じる」ものであり、また、演者が多様性をカミングアウトせねばならないことになること
もあり、そのようなアプローチはとらなかった。すなわち、俳優の多様性については、表
明する・しない、及び役柄や表現に関連付ける・付けないことについて、演出側からは依
頼等せず、本人の自由意志に任せた。

舞台で活躍するピアニストと高校生のチェリストが舞台上で音楽演奏を担当した。

上記の通り、全編にプロフェッショナルの手話通訳者を舞台上に配置した（2名の手話
通訳者が、台本に基づく通訳を公演ごとに各公演1人で担当した）。

6. 舞台装置の制作

舞台装置は、演出家、プロフェッショナルの装置デザイナー、多様性を包摂した芸術分
野の専門家が相談し、作品のテーマ、芸術性、サイズや強度、出演者のアクセシビリテ
ィ、予算を検討した上で、デザインした。特に、手話通訳者の配置、全編映写される字
幕、出はけのアクセシビリティに基づき、デザインを確定した。

装置は、稽古途中から稽古場に簡易な形で組み込み、視覚障害やダウン症のある役者を
含むすべてのキャスト・スタッフが本番に近い舞台空間に慣れることができるようにし
た。また、小屋入りに合わせて、劇場に装置を組んだ。バミリはビニールテープで行った
が、視覚に障害がある出演者については、他の俳優が自然な形且つ安全に立ち位置にエス
コートする演出とした。

視覚障害等のある観客に向けて、舞台装置のミニチュアを公演期間中、劇場のホワイエ
に展示し、触覚で舞台装置を知ることができるようにする案もあったが、感染症対策等も
勘案し、展示は行わなかった。

7. 音楽制作

プロフェッショナルの作曲チームによる楽曲を使用した。作曲チームと相談しながら、
元アレンジを尊重しつつ、プロフェッショナルの編曲家（本番ピアノ及び稽古ピアノ）が
編曲した。

また、歌詞については、多様性包摂の観点から課題がないか確認した上で、選曲した。

聴覚に障害がある観客を含む観客席から見えるように、歌詞を字幕で表示した他、手話
通訳チームと相談して、音楽の波、リズムや響きを身体的に描きながら手話通訳した。ま
た、メインの楽曲については、歌詞をチラシに掲示した。

音やリズムに合わせて、光や振動を生じさせることができる機器の導入も検討したが、
今回は演出意図に基づき、行わなかった。

8. 照明

照明は、プロフェッショナルの照明が担当した。てんかんや発達障害、PTSD等と関連

して光に敏感な観客のニーズに配慮し、爆発シーン等でもフラッシュライツ的な照明は避け、その他の演出効果を用いて表現することとした。

照明に加え、映写機を用い、全ての台詞に字幕を一つ一つ手動で台詞に合わせて表示した。照明によって字幕が見えにくくならないよう工夫した。

また、リラックス公演では、暗がり苦手な観客や、劇中に入りが必要な観客等のために、舞台上の照明とのバランスを検討した上で、客電を40%つけたままで上演した。

9. 音響

音響は、プロフェッショナルな音響が担当した。マイクやモニターの設定は、それぞれの俳優の現場でのニーズに基づき、丁寧に行った。

また、音に敏感な観客のニーズに配慮し、爆発の音などの強い音についても、大音量での表現は行わず、演出上の工夫（照明の色や俳優の表現等）によって描いた。

2公演において視覚サポート（音声ガイダンス）を入れた。スペースの関係で、視覚サポートの発信は、ホワイエにある、舞台の様子がライブで表示されるモニターの前から行った。音声ガイダンスは、ワイヤレスレシーバーによって観客席で聴けるようにした。

10. 衣装

衣装は、プロフェッショナルな衣装が担当した。それぞれの出演者のニーズ（個人的ニーズ、舞台表現上のニーズ、早替え等のニーズ等）に合わせて、事前に演出家・出演者と話し合った上で、必要な工夫を行った。

肌を露出するシーン（川での水浴びのシーン）においては、演出家が稽古場で出演者と相談し、出演者が性的指向やジェンダー・アイデンティティ等の観点からも困難や辛さを感じないように配慮した。

11. 広報

広報は、多様なニーズに対応するため、いくつかのフォーマットを組み合わせた。

ホームページ制作は、日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS が担当。これまで積み重ねた経験に基づき、ホームページ上で、読みやすいフォント、読み上げ機能に対応する表示、写真のキャプション付加、色覚多様性等への配慮を確保した。また、ダイバーシティをめぐる様々な配慮について、明記した。

日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS を中心に、ソーシャルメディアでの広報も行った。ソーシャルメディア等で出演者が直接発信するのに先立ち、出演者に対し、社会モデル等について情報共有した。

配布用のチラシも作成した。チラシにはQRコードを付け、上記のホームページに簡単に飛べるようにした。これにより、視覚障害のある方等が、携帯電話やPCの読み上げ機能等を使用しやすくした。

ホームページとチラシには、アクセシビリティや観劇サポートについての情報も掲載し、それらに関する問合せ・相談窓口を設置の上、問合せ先（メールアドレスと電話番号）を示した。

音や光の表現、性被害等のコンテンツについて、事前告知することも検討したが、様々な多様性への配慮の上、ユニバーサル³な形で表現することを目指したので、今回は行わなかった。

12. チケット予約・発売

チケット販売は、商業演劇用チケット販売を行うプレイガイドを利用した。予約は、オンライン予約と電話予約ができるようにした。

また、上記の通り、オンライン予約や電話予約において質問や困難がある方、そして、観劇サポートをめぐる問合せ向けに、問合せ用メールアドレスと電話番号を独自に設定し、制作が対応した。

観劇サポートとして、「車いす席（各回2席）」（数に限りがあるため、要事前申し込み。車いすでの鑑賞か会場の座席に移動しての鑑賞を選べ、同伴者は近くの座席へ案内することとした）、「補助犬同伴席」（要事前申し込み。ロビーでのお預かり希望にも対応可）、「手話通訳が見やすい席」（要事前申し込み）、「通路側席」（要事前申し込み。障害のある方、小さなお子さま連れの方等、上演中に入退場をする可能性のある方や客席の中まで入っていくことが難しい方向け）、「複数席」（要事前申し込み。障害等により1人で複数席の仕様がが必要な場合）の予約ができるようにした。

また、障害者割引、学生割引、小学生以下無料を設定した。

更に、1公演をリラックス公演として、子供連れの方や、光や音に敏感な方、閉所や暗所が苦手な方、じっとしているのが苦手な方、トラウマティックな反応への配慮が必要な方、トイレ等に行く方、演劇鑑賞に不安のある方など、多様な方がリラックスして楽しめるよう、上記の通り、客席のライトを常時40%点いている状態とし、あらかじめ観劇中に動いたり、声を出したり、気軽に出入りしても良いことを周知した公演として設定した。

また、劇場が所在する自治体にある支援学校等に、招待案内を送付した。

13. 演出プラン作成

演出プランは、演出家が、台本や芸術上表現したい世界観に基づき、俳優やスタッフの個性やニーズに合わせて、スタッフと俳優またはマネージメントと相談しながら作成した。例えば、車いすを使用したシーンの導線、視覚障害がある俳優の出はけ、ダウン症の

³ 障害者権利条約において、ユニバーサル・デザインとは、「調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲で全ての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計」とされている。

ある俳優の台詞量の調整、俳優の脱衣シーンや性被害のシーンのあり方等については、必要に応じて演者と建設的な話し合いを重ねて決定した。

また、これらの演出プランは、演出意図の範囲の中で、スタッフや俳優の個性やニーズに合わせて、できる限りフレキシブルに対応した。

14. 稽古スケジュール作成・調整

稽古スケジュールは、スタッフや俳優の個性やニーズに合わせて、本人またはマネージメントと相談しながら作成した。例えば、稽古時間の長短を調整した方が良い場合はそのようにし、全体稽古とは別セッションが必要な場合は別セッションを用意した。

個性やニーズに合わせて、休憩時間等にも配慮した。

また、上記の通り、劇場入りする前に、稽古場に舞台装置を配置し、導線等を本番と同じ装置で体験できるようにした。

15. 多様性に関する講習

スタッフ・俳優の顔合わせにて、障害者権利条約の社会モデルについて、多様性の専門家から共有し、人権に基づく多様性の包摂に関して、情報共有する機会を持った。

中でも、舞台制作プロセスと舞台の中身双方が、最新の人権に基づくアプローチに則り、害がないようにするため、その船頭的役割を担う演出家については、多様性の専門家と多くの会合を持ち、人権に基づくアプローチに関するアップデートされた情報と、害を予防する方法について話し合う機会を重ねた。

また、多様性を繊細に表現する必要がある主要俳優陣については、稽古前に特別に時間をとり、多様性の包摂について、小グループで専門家と話し合う会をもった。これには、多様性を演じたり、被害経験を表現したりする俳優と演出家が、自身の多様性やニーズに基づき、安心して話し合いできる土壌を作る目的もあった。

16. 顔合わせ

顔合わせは、事前に本人または事務所に、必要なアクセシビリティ要件や合理的配慮について確認をした上で、アクセシブルな会場で行った。

自己紹介等において、本人の多様性に関する自己認識等をめぐる情報については、本人が共有したい情報のみを共有してもらうよう意識した。多様性について開示しなくなったり、する必要を感じなかったりする場合、触れずに自己紹介を行えるよう配慮した。

一方で、配慮事項としてスタッフや俳優に伝えておくべきことがあるかどうか事前に確認した。

17. 稽古場での稽古

稽古場は、本人または事務所にあらかじめ確認をし、アクセシビリティを確保できる稽

古場を確保した（エレベーターがあり、大きな段差がなく、一定の広さがあり、公共交通機関からのアクセスもアクセシブルな稽古場を使用した）。

18. 舞台稽古（場当たり・ゲネプロ）

開幕前々日に、劇場での装置等仕込みを実施。

開幕前日に、場当たりとゲネプロを実施。スタッフ・俳優の導線のアクセシビリティ、照明や音響、手話通訳、字幕等の現場チェック。稽古場とは異なる環境での稽古であるため、スタッフ・俳優の導線・立ち位置等について、スタッフ・俳優のニーズに配慮しながら実施した。

19. 舞台裏・楽屋周り

楽屋口、楽屋、スタッフ・俳優用トイレ、舞台への経路、袖周り（着替えスペース、小道具・大道具の配置）のアクセシビリティの再確認。

飲食物、差し入れ、観客からのプレゼント、ゴミ箱等の配置をめぐるアクセシビリティの確認。

20. ホワイエ、トイレ等公共エリア

劇場入口からもぎりや関係者受付、トイレ、客席等へのアクセスの再確認。特に、事前に連絡を頂いた合理的配慮事項等を確認し、必要に応じてスタッフを配置。

劇場は地下にあり、階段を使用するメイン・エントランスとエレベーターを使用するエントランスが別々であったため、地上部分のメイン・エントランスとエレベーターの間にスタッフを配置。このスタッフは筆談器も所持するようにした。

ホワイエにあるトイレ（男性用、女性用、多目的トイレ）には、若者団体からの提言で、LGBTQI フラッグ・デザインの掲示を行い、多様なジェンダー・アイデンティティの方が本人の選択で、トイレを使用しやすいようにした。

ホワイエに、プライバシーを確保できる小さな空間を配置することも考慮したが、ホワイエが広く、椅子の配置も様々な場所になされていたため、今回は配置しなかった。

また、緊急時のアクセシブルな避難経路について確認した。

上記の通り、舞台装置のミニチュアを展示するか議論したが、今回は行わなかった。

21. 観客入場、もぎり、当日券販売、関係者受付、問合せ対応

劇場入口に、もぎり、配慮等の必要な席を予約した観客用窓口・当日券受付・関係者受付を設置。スタッフを配置。筆談器や音声認識技術を使って会話をリアルタイムに文字化するUDトークも用意した。

公演当日に判明するニーズがあることも踏まえ、客席数には余裕を持たせた。

また、ホワイエには、多様性包摂や社会モデルについてレクチャーを受けた学生スタッ

フや多様性に関する専門家を複数配置し、ニーズがある観客からの問合せやリクエストに対応できるようにした。この際、スタッフのネームタグに EMPOWER Project のマゼンタ・スター⁴を印刷し、「協力者カミングアウト」として、「よろしければお声がけを」の意思表示を行った。

優先入場についても検討したが、劇場の規模や導線を踏まえ、今回は実施しなかった。

公演日のうち1日は台風が上陸したため、終演後の交通機関の状況に関する問合せ等があり、筆談器等を用いて災害に関する情報提供をした。また、災害により来場が難しい方には、別公演回への振替や返金も可能とした。

22. プログラム

プログラムは、自動読み上げ等にも対応するホームページがあること、環境保護と持続可能性の観点から作成するか否かの議論があったが、制作のもとで作成。プログラムには、視覚障害のある方が、アクセシブルなホームページを通した音声読み上げ等により同じ情報にアクセスできるよう、切込みやQRコードを配置した。

点字版の作成についても議論したが、今回は作成しなかった。

23. 本番（通常公演）

本番中も、ホワイエにマゼンタ・スターを着用した受付スタッフを常時配置し、ニーズがあった際に対応できるようにした。また、劇場内にも同様のスタッフを観客席に配置し、ニーズ対応できるようにした。

更に、途中で退席しても、ホワイエのモニターで舞台を引き続き楽しめるようにした。

24. 本番（リラックス公演）

上記の通り、1公演をリラックス公演として、子供連れの方や、光や音に敏感な方、閉所・暗所が苦手な方、じっとしているのが苦手な方、トラウマティックな反応への配慮が必要な方、トイレ等に行く方、演劇鑑賞に不安のある方等、多様な方がリラックスして楽しめるよう、客席のライトを常時40%点いている状態とし、観劇中に動いたり声を出した

⁴ EMPOWER Project は、当事者がマークを着用する「ヘルプマーク」や「マタニティマーク」とは逆転の発想で、「協力が必要な時は、よければお声を」の意思を表す「当事者カミングアウト」を促進する活動。「マゼンタ・スター」（ピンクの星）が目印。星は、国旗に最も用いられている図形の一つで、文化を超えて老若男女が認識しやすく、マゼンタは、持続可能な開発目標（SDGs）の目標10「国と人の不平等をなくそう」のマークの色。東京大学の学生が提唱し、国連機関、自治体、企業、当事者団体、若者団体などと協働している。

り、自由に入出入りをして良いことを事前に周知した公演として実施した。

25. 演出家・出演者・若者等による多様性に関するトークショー

演出家、出演者、当事者等が、本作品の多様性包摂について解説したり、思いを共有したりするトークショーを企画したが、出演者のスケジュールの都合が合わず実現しなかった。

26. 観客退場

閉演後も、劇場入口にマゼンタ・スターを着用したスタッフを複数設置。筆談器やUDトークも使用できるようにした。スタッフには、上記の通り、多様性包摂や社会モデルについてレクチャーを受けた学生スタッフや多様性に関する専門家を含んだ。

優先退場についても検討したが、劇場規模や導線を踏まえ、今回は実施しなかった。

27. 関係者との面会

関係者との面会は、劇場から楽屋や楽屋口までの導線が遠く、また階段を使用する必要があったため、観客退場後、ホワイエで行うこととした。

28. 取材対応

メディア・リレーションズは、主催である日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS と制作が担当した。日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS のホームページやソーシャルメディアで発信した他、舞台の趣旨を説明したプレスリリースを発出した。これに基づき、複数のメディアがウェブ媒体等でカバーした。メディア発信においても、多様性をめぐる表現やアクセシビリティに配慮した。

更に、多様性を包摂した舞台であることに注目した NHK より、ダウン症のある俳優への密着取材が入った他、若者による若者のためのウェブプラットフォームであるボイス・オブ・ユース JAPAN でも、多様性包摂の観点から本舞台制作を追う記事が発信された。

29. 悪天候・災害・非常時の公演

公演日のうち1日は台風が上陸した。公共交通機関や足元のアクセシビリティが悪化する可能性やその他の多様なニーズを鑑み、他公演回への振替、返金対応を実施した。

また、終演後、交通機関の状況に関する問合せがあり、悪天候・災害情報について筆談器等を用いて案内した。

30. 打ち上げ

全公演終了後、打ち上げを行った。打ち上げは、制作が、劇場近くのアクセシブルなレストランを予約し、多くのスタッフ・俳優が参加した。お酒、文化や医学的コンディショ

ン、それ以外の理由に基づく食材の制限、アレルギー等をめぐって、多様性に配慮できるレストランを選択した。

III. 今回取り入れた多様性包摂の手段

ここでは、上記で述べたプロセスの中から、多様性包摂のために用いた手段を抽出して、制作のステップごとに示した。

1. 公演企画の立案

- 「ストーリー」案における多様性の包摂
- 「スタッフ」案における多様性の包摂
- 「出演者」案における多様性の包摂
- 「観客」の多様性の包摂
- アクセシビリティや合理的配慮のための予算確保
- アクセシビリティのための助成金等の確認
- 多様性を包摂した芸術の専門家との協働
- 多様な当事者との協働

2. 劇場選び

- 劇場最寄り駅のアクセシビリティ確認
- 駅から劇場までの経路のアクセシビリティ確認
- 劇場入口から客席までの経路及びホワイエ、トイレのアクセシビリティ確認
- プライバシーを確保できるスペースの確認
- 客席のアクセシビリティ確認
- 楽屋口から楽屋、楽屋から舞台への導線、舞台、舞台袖の導線のアクセシビリティ確認
- 車でのアクセス・駐車場の確認
- 舞台装置等の搬入口のアクセシビリティ確認
- 情報アクセシビリティ（字幕、手話通訳、視覚サポート等）方策をめぐる確認
- 劇場スタッフからのアクセシビリティ・合理的配慮をめぐる経験・懸念点の聞き取り

3. 台本作成

- 登場人物として、年齢、国籍、ジェンダー、セクシュアリティ、障害等の面から多様な人々や多様な関係性を包摂
- 感情や関係性の幅や揺れを描き、多様性のスペクトラムを表現
- 表現がチャリティモデル・医学モデル等に基づいていないか及び社会モデルに基づいているかの確認
- 設定や表現、台詞・用語等が、誰かを傷つけたり、ステレオタイプを助長したり、分断や対立を煽らないか確認
- 多様性をステレオタイプで捉えることでクリエイティビティが損なわれていないか確認
- 情報アクセシビリティなしでも、聴覚だけまたは視覚だけで伝わる工夫

- 台本の分量が90分程度に収まるよう工夫
- 多様性を包摂した芸術の専門家（シナリオ・ドクター）との協働
- 当事者との協働
- 多様性と文化をめぐる活動をする若者団体との協働
- 希望者に事前に台本を閲覧できるようにすることを検討

4. スタッフのリクルート

- 主催団体との多様性をめぐる協働
- 資金（多様性包摂をめぐる予算含む）の確保
- 演出家と演出プロセスにおける多様性包摂
- 制作スタッフと制作プロセスにおける多様性包摂
- 票券・チケット予約における多様性包摂（プレイガイドとの調整、アクセシビリティ関連情報の提示、問合せ先の設定、関係者受付、配慮が必要な方の座席配置、もぎり等）
- 舞台監督と舞台監督プロセスにおける多様性包摂
- 演出部と演出部の作業における多様性包摂
- 装置・大道具スタッフと装置・大道具をめぐる多様性包摂
- 音楽制作者、稽古ピアノ等と音楽をめぐる多様性包摂
- ムーブメント・振付スタッフと振付プロセスをめぐる多様性包摂
- 照明スタッフと照明における多様性包摂
- 衣装・小道具スタッフと衣装・小道具をめぐる多様性包摂
- 音響スタッフと音響をめぐる多様性包摂
- 劇場スタッフと劇場内サービスの多様性包摂
- 多様性を包摂した芸術の専門家（シナリオ・ドクター）との協働
- 多様性と文化をめぐる活動を行う若者団体との協働
- 障害者当事者団体との協働
- アクセシビリティ施策の各部門への主流化
- アクセシビリティや合理的配慮に必要なスタッフの登用（手話通訳者、音声ガイダンス等）

5. キャスティング

- 年齢、ジェンダー、障害等の観点から多様な俳優をキャスティング
- 音楽演奏者の多様性包摂
- 全編に舞台上に出演者として手話通訳者を配置
- 出演者の多様性を開示するか否か、どう表現するかは、本人が決定

6. 舞台装置・大道具の制作

- 演出家、プロフェッショナルの装置デザイナー、多様性のある芸術分野の専門家が相談し、作品のテーマ、芸術性、サイズや強度、出演者のアクセシビリティ、予算を検討した上で、デザイン・作成（特に、手話通訳者の配置、字幕、出はけのアクセシビリティを考慮）
- 稽古場に簡易な形で装置を配置（俳優・スタッフが本番に近い舞台空間に慣れることができるように）
- バミリはビニールテープで行ったが、視覚に障害がある出演者については、他の役者が自然且つ安全に立ち位置にエスコートできるよう演出
- 触覚で舞台装置を知ることができるようなミニチュア舞台装置のホワイエ展示の検討

7. 音楽制作

- 歌詞に多様性包摂の観点から課題がないか確認
- 歌詞を舞台上に字幕で表示
- 歌詞を手話通訳しつつ、音楽の波、リズム、響きを手話通訳で表現
- メロディやリズムに合わせて光や振動を感じられる表現・機器使用の検討

8. 照明

- 光に敏感な観客のニーズに配慮し、フラッシュライต์的な照明は避け、その他の演出効果を用いて表現
- 全ての台詞につき、舞台上に字幕を表示
- リラックス公演では、客電を40%つけた状態で上演

9. 音響

- 音に敏感な観客のニーズに配慮し、大音量での表現は行わず、演出上の工夫で表現
- 2公演において、ワイヤレスレシーバーによるライブ視覚サポート（音声ガイダンス）の導入

10. 衣装

- それぞれの出演者のニーズ（個人的ニーズ、舞台表現上のニーズ、早替え等のニーズ等）に合わせ、事前に演出家・俳優と相談・配慮
- 肌を露出するシーンでは、演出家・出演者と相談・配慮

11. 広報

- 広報は、多様なニーズに対応するため、複数フォーマットで実施（ホームページ、ソーシャルメディア、チラシ、プレスリリース）
- ホームページは、読みやすいフォント、読み上げ機能、写真のキャプション付加、色覚

多様性等への配慮を確保

- ソーシャルメディアでの出演者による発信に先立ち、出演者に対して多様性の専門家より人権モデル・社会モデル・用語について情報共有
- チラシにQRコードを付け、ホームページに簡便に飛べるようにすることによる、携帯電話やPCの読み上げ機能等との紐づけ
- それぞれの媒体に観劇サポートを含む多様性をめぐるアクセシビリティ対応・合理的配慮について明記
- 光や音、トラウマ等をめぐる表現についての事前周知・注意喚起の必要性の検討
- アクセシビリティや合理的配慮に関する問合せ・相談窓口を設置（メールアドレスと電話番号）

12. チケット予約・発売

- 商業演劇用チケット販売プレイガイドを利用し、オンライン予約と電話予約のオプションを用意
- 予約においてサポートが必要な方、観劇サポートをめぐる問合せ向けに、問合せ用メールアドレスと電話番号を独自に設定・対応
- 「車いす席（各回2席）」を設定（要事前申し込み。車いすでの鑑賞か会場の座席に移動しての鑑賞を選べ、同伴者は近くの座席へ案内）
- 「補助犬同伴席」を設定（要事前申し込み。ロビーでのお預かりも対応可）
- 「手話通訳が見やすい席」を設定（要事前申し込み）
- 「通路側席」を設定（要事前申し込み）
- 「複数席」を設定（要事前申し込み）
- 障害者割引を設定
- 学生割引を設定
- 小学生以下無料を設定
- 1公演をリラックス公演として設定
- 当日のニーズに対応できるようにするための余裕をもった座席設定
- 支援学校等への招待案内の送付

13. 演出プラン作成

- 演出家が、スタッフ・俳優の個性やニーズに合わせて、スタッフと俳優またはマネジメントと相談しながら作成
- 特に、スタッフ・俳優の導線・アクセシビリティ・合理的配慮、俳優の脱衣シーンのあり方、性被害のシーン等については、稽古場で建設的話し合いを設定
- 演出プランの変更は、できる限りフレキシブルに対応

14. 稽古スケジュール作成・調整

- 稽古スケジュールは、スタッフ・俳優の個性やニーズに合わせて、本人またはマネージメントと相談しながら作成（全体稽古とは別セッションが必要な場合の別セッション設定等）
- 個性やニーズに合わせて、休憩時間にも配慮
- 稽古場に舞台装置を配置し、本番に近い装置での稽古実施

15. 多様性に関する講習

- 演出家は、多様性を包摂した芸術の専門家と多くの会合を持ち、多様性をめぐる最先端の情報と、害を予防する方法についてよく対話し、共有
- 顔合わせにて、スタッフ・俳優に、人権モデルや障害者権利条約の社会モデル、性的指向やジェンダー・アイデンティティをめぐる動向等につき、多様性の専門家から情報共有
- 主要俳優陣については、別途、多様性の包摂について、専門家と話し合う小グループの機会を設定
- 若者劇場スタッフに対する多様性包摂についての情報共有とディスカッション機会の設定
- その後も、多様性包摂等に関して、多様性の専門家に相談できる体制を確保

16. 顔合わせ

- 事前に本人または事務所に、必要なアクセシビリティ要件や合理的配慮について確認した上で、アクセシブルな会場を選択
- 自己紹介等において、本人の多様性をめぐる自己認識等をめぐる情報については、本人が共有したい情報のみを共有できるよう配慮

17. 稽古場での稽古

- 本人または事務所にあらかじめ確認をし、アクセシビリティを確保できる会場を確保
- 本人と事務所に確認した上で、合理的配慮を行った上で稽古を実施

18. 舞台稽古（場当たり・ゲネプロ）

- スタッフ・俳優の導線のアクセシビリティ、照明や音響、手話通訳、字幕等の現場チェック・必要に応じた変更

19. 舞台裏・楽屋周り

- 楽屋口、楽屋、スタッフ・俳優用トイレ、舞台への経路、舞台、袖周り（着替えスペース、小道具・大道具の配置）のアクセシビリティの再確認

- 飲食物、差し入れ、プレゼント、ごみ箱等の配置をめぐるアクセシビリティの確認

20. ホワイエ、トイレ等公共エリア

- 劇場入口からもぎりや受付、トイレ、客席等へのアクセスの再確認
- その日の合理的配慮事項等を確認し、必要に応じて準備・スタッフ配置
- ホワイエにあるトイレに、LGBTQI フラッグ・デザインを掲示
- ホワイエで、プライバシーを確保できる空間の確認
- 災害・非常時のアクセシブルな避難経路の確認
- 舞台装置を触覚で確認できるミニチュア展示の検討

21. 観客入場・もぎり・当日券販売、関係者受付、問合せ対応

- もぎり、配慮の必要な席を予約した観客受付、当日券受付、関係者受付を、筆談器やUDトークと共に設置
- 優先入場の検討
- 公演当日に判明するニーズがあることも踏まえ、受付・ホワイエ・劇場内に多様性や社会モデルについてトレーニングを受けたスタッフを配置
- スタッフによる「協力者カミングアウト」のEMPOWER Project「マゼンタ・スター」の着用
- 災害（台風）時、受付・ホワイエのスタッフが筆談器等を用いて案内
- 災害時の振替・返金対応

22. プログラム

- 印刷したプログラムには、アクセシブルなホームページを通して、同じ情報にアクセスできるよう、切込みやQRコードを配置
- プログラムでは漢字に読み仮名を表示
- 点字版プログラムの検討

23. 本番（通常公演）

- 公演中も、ニーズがあった際に対応できるよう、ホワイエにマゼンタ・スター着用スタッフを常時配置
- 観客席にもスタッフを配置
- ホワイエのモニターで舞台が見られるよう設定

24. 本番（リラックス公演）

- 1公演をリラックス公演として実施

25. 演出家・出演者・若者等による多様性に関するトークショー

- 演出家や出演者等が、作品の多様性包摂について解説したり、思いを共有したりするトークショーの検討

26. 観客退場

- 優先退場の検討
- 閉演後も、ホワイエや劇場入口にマゼンタ・スターを着用したスタッフを筆談器やUDトークと共に複数配置

27. 関係者との面会

- 関係者との面会をアクセシブルな場所で開催

28. 取材対応

- 多様性をめぐる表現やアクセシビリティに配慮したプレスリリースを発信
- 取材は、本人及び周りのスタッフ・俳優の許可を得て実施

29. 悪天候・災害時の公演

- 災害時のアクセシビリティ確保等について事前に相談・検討し、実施
- 災害時の情報アクセスの強化
- 災害時の振替・返金の実施

30. 打ち上げ

- アクセシビリティと、アレルギー、文化や医学的コンディション、それ以外の理由に基づくアルコールや食材の制限等をめぐって、多様に配慮できるレストランを選択

IV. 来場者アンケートの結果

1. 来場者アンケートの実施

来場者アンケートは、多様性に配慮し、紙の質問票とQRコードでアクセスできるオンライン質問票を用意した。ここでは、有用だったサービス、印象的だったサービス、困ったことやあってほしかったサポートについての回答を示した。尚、回答は、無記名で、回答したくない質問は飛ばしてよい旨、明示した。

2. 来場者アンケート回答者の属性

来場者アンケートに回答したのは、698名の来場者中、110名であった。

回答者の性別（性自認）は、男性が35名（31.8%）、女性が72名（65.5%）、それ以外が3名（2.7%）であった。

年齢は、10代が7名（6.4%）、20代が15名（13.6%）、30代が17名（15.5%）、40代が18名（16.4%）、50代が29名（26.4%）、60代が18名（16.4%）、70代が5名（4.5%）、無記名が1名（0.9%）であった。

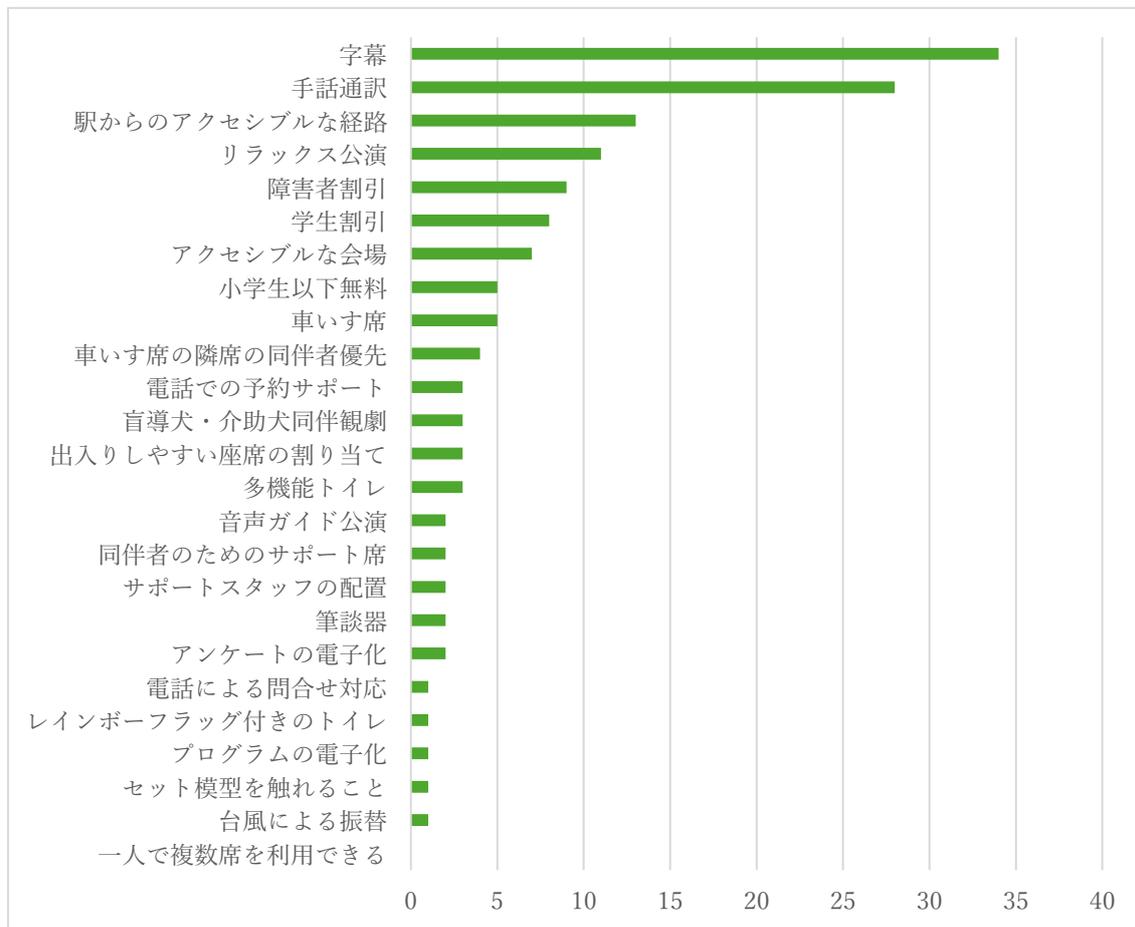
職業は、会社員が33名（30%）、個人事業主・フリーランスが15名（14.6%）、学生が13名（11.8%）、団体職員、パート・アルバイトがそれぞれ9名（8.2%）ずつ、自営業が4名（3.6%）、主婦が2名（1.8%）公務員が1名（0.9%）、無記入を含むその他が23名（20.9%）であった。

身体障害があると回答したのは2名、聴覚障害があると回答したのは6名、視聴覚障害、軽い難聴があると回答したのはそれぞれ1名ずつ、障害について回答しないとしたのは3名であった。また、障害のある人の同伴者として来場したと回答したのは3名であった。

3. 有用だったサービス

有用だったサービスについて聞いた問いへの回答（複数回答可）を表1に示した。最も回答数が多かったのは、字幕で34名（22.5%）が有用と回答した。次に多かったのは、手話通訳で28名（18.5%）であった。5名以上が有用とした項目には、駅からのアクセシブルな経路（13名、8.6%）、リラックス公演（11名、7.3%）、障害者割引（9名、6%）、学生割引（8名、5.3%）、アクセシブルな会場（7名、4.6%）、車いす席（5名、3.3%）があった。

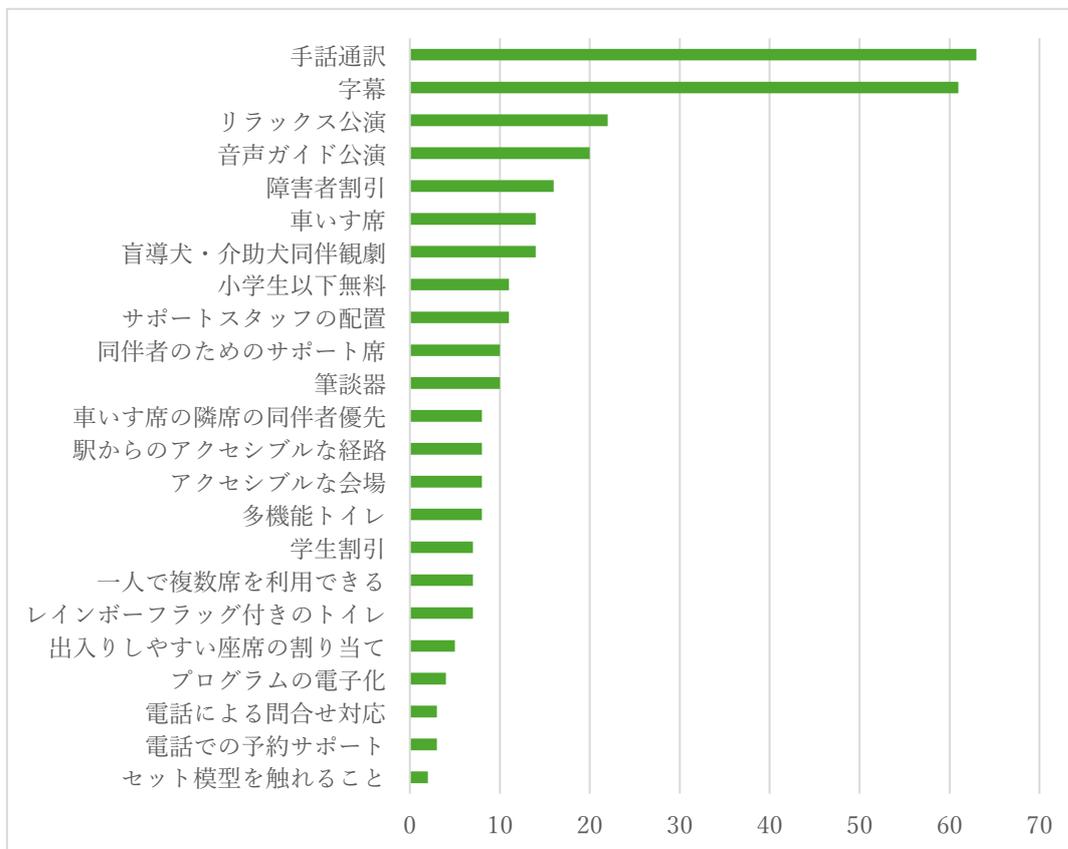
表1. 有用だったサービス（複数回答可）



4. 印象的だったサービス

また、利用したかどうかを問わず、印象的だったサービスについて聞いた問いへの回答については、表2に示した。複数回答可で問った結果、手話通訳、字幕、リラックス公演、音声ガイド公演、障害者割引、盲導犬・介助犬同伴観劇、サポートスタッフの配置、小学生以下無料、筆談器、同伴者のためのサポート席等が印象的と認識されていた。

表2. (利用したか否かを問わず) 印象的だったサービス (複数回答可)



5. 困ったこと・あってほしかったサポート

アンケートでは、困ったこと、あってほしかったサポート、足りなかったことについても自由回答で記入をしてもらった。アンケートでは、観劇サポート等についてのポジティブなフィードバックが多かったが、冷房が寒かったこと、(地下にある劇場へのアクセスにおいて) エレベーターがあることが分かりにくかったこと、舞台上で靴が擦れる音が不快だったこと、駅からの地図がわかりにくかったこと、トイレ休憩が欲しかったこと、手話通訳者が誰かを事前に示してほしかったこと、音楽が流れている際の字幕について「♪」と共に演奏している楽器情報が付記されているとよかったこと、英語に和訳が欲しかったことをめぐるコメントがあった。

V. 考察

今回開催した True Colors TEATER では、主催者と演出家のリーダーシップのもと、障害のある人や若者を含む多様性「当事者」と「専門家」を交え、多くのスタッフと出演者が「多様性を包摂した舞台体験」を目指して協働した。

この際、舞台のストーリー、スタッフ、出演者、観客のそれぞれにおいて、年齢・出身地・ジェンダー・セクシュアリティ・障害等の多様性の包摂を促進するよう心掛けた。特に、国連障害者権利条約や、その中で提唱された「人権に基づくアプローチ」、「社会モデル」、「当事者参加」を、障害に限らず、全ての人のあらゆる違いを前提に、大切に進めた。中でも、アクセシビリティ施策や合理的配慮に詳しい障害当事者や、舞台観劇経験が豊富でテクノロジーに精通した多様な若者当事者が参加することで、各ステップを丁寧に確認することができた。また、多様性を包摂した芸術をめぐる専門家が参加することで、時と共に変わりゆくため、善意に基づいていても害がありうる表現や対応を防ぐようにした。

その中では、「制度・環境」のバリアへの対策をすることでアクセシビリティを高めると共に、スタッフ・出演者との情報共有や建設的対話に基づき多様性包摂へのアウェアネス（意識）をアップデートし更に向上させつつ「態度」のバリア対策を行い、様々な情報保障を採用することによって「情報」のバリアにも対応した。この際、多様なニーズに対応できるようにするために、「オプションを増やすこと」をモットーとした。例えば、台本と演出に工夫をし、聴覚もしくは視覚情報だけで舞台が楽しめることを目指しつつ、全編に字幕と手話通訳を導入することで、様々な人の様々なニーズに応えやすくした。

更に、舞台制作の全てのステップ・領域に多様性包摂をメインストリーミングしていくことで、「ユニバーサルな舞台」を目指すと同時に、スタッフ、出演者、観客「一人ひとりの多様なニーズに基づく合理的配慮」ができるよう、制作、稽古、広報、予約、観劇それぞれの段階で、建設的対話を含む個別相談・対応ができる体制もしいた。

一方で、教訓もあった。まずは、資金面の課題である。情報保障を含むアクセシビリティの向上には工夫やクリエイティビティで対応できる部分も多くあるものの、専門的なスキルを有した人材が不可欠となる部分もあり、そのための予算も必要となる。これについては、日本では未だ実績が少ない上、その場のニーズに基づく追加的な支出も増えるため、予算を超える支出があった。また、様々なスタッフ・出演者と協働しながら作り上げていくプロセスの中では、ニーズとニーズの間で齟齬が生じたり、ニーズと実現可能性が合致しなかったりする状況も多く生じうる。今回も、心身への負担になったり、コミュニケーション上の課題が生じたり、一部のタスクへの集中によって他のタスクの実施が滞ったり、スケジュールに余裕がなくなることもあった。これらは、ネガティブな側面というより、多様性の包摂と建設的対話に基づく合理的配慮を促進したからこそ表面化した事象とも言えよう。本来はすべての舞台制作の現場で生じうる事象であり、実際に多くの現場において経験されていることでもある。よって、スタッフや俳優が表明しているかど

うかを問わず、全ての現場において、スタッフ・出演者・観客の多様性を前提に、アクセシビリティや合理的配慮のための予算、時間、工夫、オプション、人員を少しでも増やし、個々人の状況によって状況やスケジュールをフレキシブルに調整できるよう計画し、これを支える専門家や当事者との普段からのパートナーシップを強化することが有用だろう。

また、災害・非常時の避難経路の確保をめぐっては、今回使用した劇場が地下にあり、平常時はエレベーターでのアクセスが可能であるものの、地震や火事発生時等エレベーターが使用できない場合、対策が難しい状況があった等、課題もあった。

昨今は、芸術表現であっても、ソーシャルメディア上での炎上例等を鑑み、そつなく、型にはめた表現とすることで安易にリスク回避をしたり、多様性包摂をしたことにしたりしようとする動きもある。また、舞台予算の高騰により、様々な出資者が制作に関わり、マルチ・プロデューサー化する中で、多様なスタッフや俳優一人ひとりの経験、ニーズ、表現等が活かされず、平板化した舞台も多い。しかし、本来の多様性を包摂した芸術表現は、関わる全ての人々が、安心・安全な環境において、一人ひとりの違いが尊重され、合理的な範囲でニーズへの配慮やサポートがなされる中、過去に経験した痛みやそれを乗り越える思いに基づき、卓越した芸術表現を通して、触れた人に驚愕や共感、感動、勇気、学びを生み出すものである。専門家や当事者と協働し、多様性をめぐるアップデートされた情報と経験に基づき、主流化を通したユニバーサル化と、個別ニーズへの建設的対話を通した配慮を通した、多様性を包摂した舞台体験が広がるよう、本公演の経験が役立つと良いと思う。

尚、本報告書は、既存の劇場を使用した取組みの事例であり、新たに劇場やホールを設計・施工する上では、ここで示した取組みとは別途の取組みが必要となる。

VI. 多様性を包摂した舞台のためのチェックリスト

本公演から得られた好事例と教訓及びこれまでの積み重ねに基づき、今後のパフォーマンス実践に役立つよう、現時点における「多様性を包摂した舞台体験」のための「チェックリスト」を作成した。舞台制作の工程を31ステップに分け、全131の項目について、ニーズ、予算、人員、バリアを検討する助けとなることを目指した。

アクセシビリティのニーズは、個人・環境・物理的条件・文化・利用できるテクノロジー・時代・コンテキスト・予算等によって異なる。また、様々な要因に基づくバリアや制限がある場合も多い。よって、チェックリストにある項目は、全てを満たすことを目指すためではなく、建設的に検討・対話をする際に有用と思われる事項を提示したものである。これら以外にも重要な要素があるため、個人のニーズ、コンテキスト、建設的対話等に基づき、状況に応じた追加対応や工夫が重要である。特に、新規に劇場やホールを作る際には、更なる項目を検討する必要がある。

多様性を包摂した舞台チェックリスト

I. 企画・立案	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 「ストーリー」案の多様性包摂観点からの確認				
2. 「スタッフ」案の多様性包摂観点からの確認				
3. 「出演者」案の多様性包摂観点からの確認				
4. 「観客」の多様性包摂をめぐる計画の確認				
5. アクセシビリティ・合理的配慮のための予算策定・確保				
6. アクセシビリティのための助成金申請の検討				
7. 多様性を包摂した芸術分野の専門家との協働				
8. 多様な当事者（障害、SOGI、年齢、出身地等）との協働				
II. 劇場のブックイング	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 劇場最寄駅のアクセシビリティ確認				
2. 駅から劇場までの経路のアクセシビリティ確認				
3. 劇場入口から客席までの経路（ホワイエ合）のアクセシビリティ確認				
4. 観客用トイレのアクセシビリティ確認（多機能トイレ・ジェンダー配慮等）				
5. プライバシーを確保できるスペースの検討				
6. 客席のアクセシビリティ確認（車いす席等のサイトラインの確保含）				
7. 楽屋口から楽屋、楽屋から舞台への導線、舞台袖、舞台のアクセシビリティ確認				
8. 車でのアクセス・駐車場の確認				
9. 舞台装置等搬入口のアクセシビリティ確認				
10. 情報アクセシビリティ（字幕、手話通訳、視覚サポート等）をめぐる確認				
11. 劇場スタッフに対するアクセシビリティ・合理的配慮をめぐる経験・懸念点の聞き取り				
III. 台本作成	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 登場人物の多様性（年齢、国籍、SOGI、障害等）包摂				
2. 多様性をステレオタイプではなく「違いのスペクトラム」として描いているかの確認				
3. チャリティ・医学モデルではなく、社会モデルに基づいているかの確認				
4. 設定、表現、台詞、用語等が、誰かを傷つけたり、分断や対立を生まないかの確認				
5. そもそも全ての人が異なり、同じ人でも状況や時によって異なることへの理解の確認				
6. 聴覚だけ、視覚だけで伝わる表現の工夫				
7. 台本の分量・上演時間の配慮（短さ・休憩等）				
8. 多様性を包摂した芸術の専門家・シナリオ・ドクターによる確認				
9. 当事者との協働				
10. 点字台本作成の検討				
11. 希望者への事前台本閲覧の検討				
IV. スタッフのリクルート	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 主催・共催・後援団体との多様性をめぐる協働				
2. 出資元の確保				
3. 演出家と演出プロセスにおける多様性包摂				
4. 制作スタッフと制作プロセスにおける多様性包摂				
5. プレイガイド等チケット担当との多様性包摂をめぐる調整				
6. 舞台監督と舞台監督プロセスにおける多様性促進				
7. 演出部スタッフと演出部の作業における多様性包摂				
8. 装置・大道具スタッフと装置・大道具をめぐる多様性包摂				
9. 音楽スタッフと音楽をめぐる多様性包摂				
10. 振付スタッフと振付プロセスをめぐる多様性包摂				
11. 照明スタッフと照明における多様性包摂				
12. 衣装・小道具スタッフと衣装・小道具をめぐる多様性包摂				
13. 音響スタッフと音響をめぐる多様性包摂				
14. 劇場スタッフと劇場内サービスの多様性包摂				
15. 多様性を包摂した芸術の専門家・シナリオ・ドクターとの協働				
16. 多様性と文化に関する経験を持つ若者との協働				
17. 当事者団体との協働				
18. 各部門へのアクセシビリティ施策の主流化				
19. アクセシビリティや合理的配慮のための専門家（手話通訳等）のリクルート				
V. キャスティング	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 俳優の多様性包摂				
2. 演奏者・ダンサー等の多様性包摂				
3. 手話通訳者や音声ガイダンス等の配置検討				
4. 出演者の多様性をめぐる表現（表現しないこと）の尊重				

VI. 舞台装置・大道具制作	ニーズ	予算	人員	バリア
1. スタッフ・出演者のアクセシビリティと観客の情報アクセシビリティを検討したデザイン				
2. 稽古場におけるスタッフ・俳優への配慮（本番に近い環境の創生含）				
3. パミリでは不十分な際の移動サポートの検討				
4. 触れるミニチュア舞台装置展示の検討				
VII. 音楽制作	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 楽譜の点字翻訳ニーズの検討				
2. 歌詞の多様性包摂観点からの確認				
3. 歌詞の字幕表示の検討				
4. 歌詞の手話通訳の検討				
5. 音やリズムに合わせて光や振動を生じる機器使用の検討				
VIII. 照明	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 照明の多様性包摂観点からの検討（フラッシュライトを使用しない等）				
2. 台詞の字幕表示の検討（表示する場合、舞台映写、タブレット使用等方法も検討）				
3.（リラックス公演等における）客電使用の検討				
IX. 音響	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 音量や音の種類に関する多様性包摂観点からの検討（大音量にしない等）				
2. 視覚サポート・音声ガイダンスの検討				
X. 衣装	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 多様性包摂観点からの衣装、演出家、出演者の話し合い				
2. 肌を露出するシーンをめぐる衣装、演出家、出演者の話し合いと配慮				
XI. 広報	ニーズ	予算	人員	バリア
1. フォーマットの組合せの工夫（ホームページ、ソーシャルメディア、チラシ等）				
2. ホームページにおけるフォント、読み上げ機能、キャプション、色覚多様性等の配慮				
3. 発信に先立つスタッフ・出演者に対する人権モデル・社会モデルについての情報共有				
4. チラシ等紙媒体へのQRコード付与等を通じたアクセシビリティ確保				
5. 広報における、アクセシビリティ・観劇サポート・合理的配慮に関する情報提示				
6. 光や音、性表現、暴力シーン等をめぐる事前周知・注意喚起の必要性の検討				
7. アクセシビリティ・観劇サポート・合理的配慮に関する問合せ窓口設置の検討				
XII. チケット予約・販売	ニーズ	予算	人員	バリア
1. チケット予約方法の検討（オンライン予約や電話予約等の組合せ方等）				
2. 予約サポートや観劇サポートをめぐる問合せ用窓口設置の検討				
3. 「車いす席」（車いすで鑑賞できる席や座席に移動しての鑑賞、同伴者対応等）の検討				
4. 「補助犬同伴席」の検討（ロビーでのお預かりニーズについても検討）				
5. 「手話通訳が見やすい席」の検討				
6. 障害等の観点から必要な方向への「通路側席」の検討				
7. 障害等により1人で複数席が必要な方向への「複数席」の検討				
8. 客電と音量を調整し、声を出したり、出入りしやすい「リラックス公演」の検討				
9. 当日のニーズに対応できるようにするための「予備席」の検討				
10. バリア等により舞台へのアクセスが限られている方の「招待」の検討				
XIII. 演出プラン	ニーズ	予算	人員	バリア
1. スタッフ・俳優の個性・ニーズに合わせた演出プランの作成				
2. 稽古場での多様性包摂をめぐる建設的対話機会の検討				
3. スタッフ・俳優の多様性に合わせた演出プランのフレキシブルな調整				
XIV. 稽古スケジュール	ニーズ	予算	人員	バリア
1. スタッフ・俳優の個性・ニーズに合わせた、稽古スケジュールの作成				
2. 個性・ニーズに合わせた休憩時間の設定				
3. 本番に近い装置を稽古場に組む必要性の検討				
XV. 多様性講習	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 多様性を包摂した芸術の専門家や当事者による演出家への多様性講習の検討				
2. スタッフ・俳優に対する多様性講習の検討				
3. 主要俳優陣に対する多様性講習と当事者・専門家との対話機会の検討				
4. 多様性包摂等に関して、専門家に相談できる体制の検討				
XVI. 顔合せ	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 事前にスタッフ・俳優のニーズを確認した上でのアクセシブルな会場の確保				
2. 紹介で開示する情報は、本人が共有したい情報のみとできるよう配慮				
XVII. 稽古場での稽古	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 事前にスタッフ・俳優のニーズを確認した上でのアクセシブルな会場の確保				
XVIII. 舞台稽古（場当たり・ゲネプロ）	ニーズ	予算	人員	バリア
1. スタッフ・俳優の導線アクセシビリティ、照明・音響、手話通訳、字幕等の確認				

XIX. 舞台・舞台袖・楽屋	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 楽屋、スタッフ・俳優トイレ、舞台への経路、舞台、袖のアクセシビリティ再確認				
2. 飲食物、差し入れ、プレゼント、ゴミ箱等の配置をめぐるアクセシビリティの再確認				
XX. ホワイエ・トイレ等公共エリア	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 劇場入口からもざり、関係者受付、トイレ、客席等へのアクセシビリティ再確認				
2. 当日の合理的配慮事項の確認と準備				
3. ホワイエにあるトイレの多様性包摂（LGBTQフラッグの掲示等）				
4. ホワイエで、プライバシーを確保できる空間の配置検討				
5. 災害・非常時のアクセシブルな避難経路の確認				
6. 触れるミニチュア舞台装置展示の検討（VI-4）				
XXI. もざり、当日券販売受付、関係者受付、観客サポート席受付	ニーズ	予算	人員	バリア
1. もざり、当日券販売受付、関係者受付、観客サポート席受付の設置（筆談器等設置）				
2. 優先入場の検討				
3. 受付・ホワイエへの多様性包摂について講習を受けたスタッフの配置				
4. スタッフのEMPOWER Project「マゼンタ・スター」（協力者カミングアウト）の着用				
5. 災害・非常時の多様性を包摂した対応想定・訓練				
6. 災害等時（アクセシビリティが低下しやすい）の振替・返金の検討				
XXII. プログラム	ニーズ	予算	人員	バリア
1. プログラム作成時は、切込みやQRコード等を配置する等情報保障法を検討				
2. プログラムのフォント、文字サイズ、ルビの検討				
3. カラー・ユニバーサルデザインの検討				
4. 点字版プログラムの検討				
XXIII. 本番（通常公演）	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 本番中もホワイエにマゼンタ・スター着用スタッフを常時配置				
2. 本番中も劇場内にスタッフを常時配置				
3. ホワイエのモニターでの舞台鑑賞ができるようにすることの検討				
4. 別室観劇ができるようにすることの検討				
XXIV. 本番（リラックス公演）	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 客電と音量を調整し、声を出したり、出入りしやすいリラックス公演の検討（XII-8）				
XXV. トークショー	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 本番前後のトークショーの検討（情報保障の検討も）				
XXVI. 観客の退場	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 優先退場の検討				
2. 閉演後も、ホワイエにマゼンタ・スターを着用したスタッフを配置				
XXVII. 関係者の面会	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 関係者との面会場所のアクセシビリティ確認				
XXVIII. 物販	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 物販場所・方法のアクセシビリティ確認				
XXIX. 取材対応	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 多様性をめぐる表現やアクセシビリティに配慮したプレスリリースの発出				
2. 取材時の本人及び周りのスタッフ・俳優の同意の徹底				
XXX. 悪天候・災害・非常時対応	ニーズ	予算	人員	バリア
1. 災害・非常時のアクセシビリティ確保をめぐる想定・訓練・実施				
2. 災害等時（アクセシビリティが低下しやすい）の振替・返金の検討（XXI-6）				
3. 災害・非常時の情報アクセシビリティ支援				
XXXI. 打ち上げ	ニーズ	予算	人員	バリア
1. アクセシビリティ、アレルギー、文化等、多様性に配慮した会場選択				

協力者

堤敦朗（金沢大学）

砂子阪将大（金沢大学）

東京大学 UNiTe

砂川幸子（東宝株式会社）

山田悠平（精神障害当事者会ポルケ）